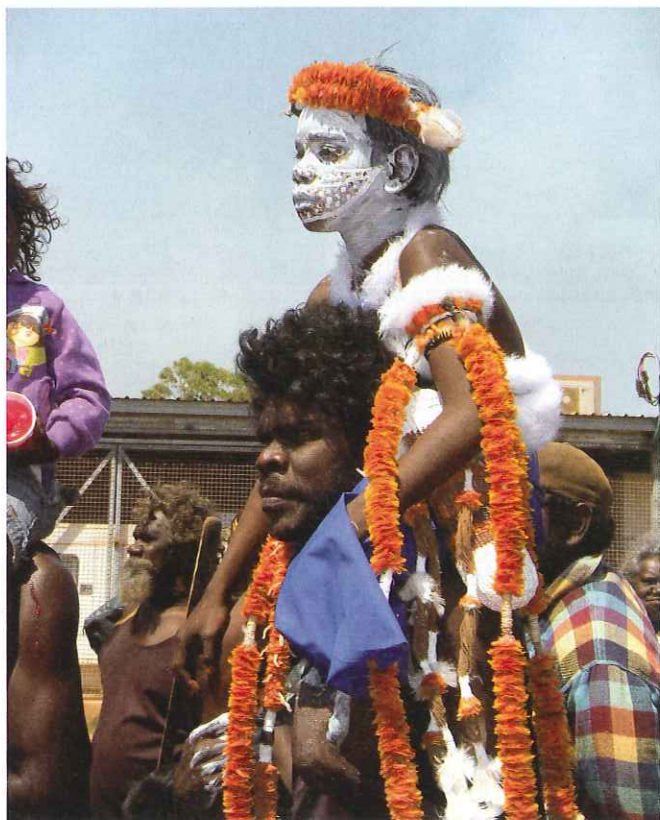


今、世界が注目するアボリジニ・アート

〈聞き手〉 松村 文衛

アットホーム株式会社代表取締役

オーストラリアの先住民 アボリジニの独特の世界観を 彼らのアートから紐解く



ヨルングの成人儀礼の様子。顔や胸にドリーミングのシンボルを描く(写真提供:窪田幸子氏)

部族ごとの精霊神話を 独自の技法で描写

——先生は文化人類学がご専門で、オーストラリアの先住民、アボリジニについて研究されていると伺っています。現在、大阪の国立民族学博物館を皮切りにアボリジニ・アートの巡回展覧会「ワンロード—現代アボリジニ・アートの世界」が開催されていますが、その開催には先生もご尽力されたとか。今、アボリジニ・アートの人気は高まっているのですか？

窪田 はい。アボリジニ・アートは、抽象的な独自の世界観が現代アートとして高い



神戸大学大学院国際文化学研究科教授

窪田 幸子氏

Sachiko Kubota

1959年東京都生まれ。88年甲南大学大学院博士後期課程単位取得退学、97年広島大学総合科学部助教授、2009年より現職に就任。オーストラリアの先住民、アボリジニの研究を専門とし、広く、国家、国際言説、先住民のあいだのダイナミズムにも研究を広げている。著書に、『アボリジニ社会のジェンダー人類学—先住民・女性・社会変化』（世界思想社）、『先住民』とはだれか』（共編著/世界思想社）など。

▶ 対談記事はWeb版「こだわりアカデミー」でもご覧いただけます。バックナンバーも掲載中。ジャンル別検索も可能です。

こだわりアカデミー

<http://athome-academy.jp/>

評価を受け、国際的にも非常に高い評価を得ています。2008年に日本で開催した展覧会でも評判になったアボリジニのアーティスト、エミリー・ウングワレの作品などは、今ではサザビーズのオークションで約1億円の値がつくほどです。

——1億円とはすごいですね！アボリジニ・アートの魅力とは、いったいどのようなものなのでしょうか？

窪田 なんといつても、彼ら独自の世界観が描かれているところですね。アボリジニは部族ごとに「ドリーミング」という、祖先から伝わる精霊の旅の話を受け継いでおり、文字を持っていないので、絵でドリーミングを表現しているのです。精霊たちは人間や



現代アボリジニ・アートの例「ククン Kunkun 2008」
 ノーラ・ナンガバ、ノーラ・ウォムビー、プーガイ・ワイルター、クームバヤ・ギルガバ(マトウミリア・アーティスト)。リネン地にアクリル絵の具。124.5×294cm。オーストラリア国立博物館蔵。現在、「ワンロード展」で巡回展示中

動物の姿をしていて、その旅の過程は「自分たちの世界はどのようにでき上がってきたか」ということを表しています。

—— 神話のようなものでしょうか？

窪田 はい、そうです。中でもアボリジニは土地とのつながりを非常に大事にしていますから、ドリーミングにもそれが表れています。ドリーミングにまつわる場所は部族の聖地になっているほどです。

—— ドリーミングは具体的にはどのような話があるのですか？

窪田 例えば、私が調査しているオースト



成人儀礼のために胸に文様を描く。クランごとのドリーミングストーリーを象徴する文様が描かれる。これが樹皮画のもともとのかたち。学生時代のフィールドワーク中は、あるアボリジニ女性と仲良くなったことでその家族の「娘」となり、親族付き合いを深めながら調査したという(写真提供:窪田幸子氏)

リア大陸北部のヨルングという部族では、「サメの精霊」をドリーミングのシンボルにしています。サメの精霊は、東から西に旅を続け、どこを訪れた、誰それと喧嘩したなど、途中で起こった出来事を語るのですが、この道すがら、土地の景観を作り、動植物を生み出し、アボリジニ社会を統率する道徳や儀礼などを定めていくのです。サメは最後には殺されてしまうのですが、その肉が飛び散った場所など、話に因んだいくつかの場所も言い伝えがあつて、実際にヨルングの聖地とされています。

—— なるほど。先ほど部族ごとにドリーミングがあると伺いましたが、部族が違って理解できるものなのですか？

窪田 いえ。基本的にはその部族内だけで通じるものです。アボリジニの部族は「クラン」と呼ばれる親族集団で形成されており、

ドリーミングは、同じ部族内であればいくつかのクランで共通性が見られます。先ほどのヨルングは約50クランがあり、合計約6000人の部族民がいます。その程度の規模の中ではドリーミングに共通性があります。

—— オーストラリア全体では、ヨルングのような部族はどのくらいいるのですか？

窪田 現在は混血して、母語を失った人々もいますが、部族数としては600といつていいでしょう。ただ、ヨルングのように、その言語、文化、慣習、儀礼などを行っている地域集団(部族)の数は、100程度でしょうか。

アートが民族自立のきっかけにも オリンピックのシンボルにも

—— ドリーミングは、具体的にどのような絵で表現されているのでしょうか？

窪田 今では、現代アートと認められている抽象的な表現もありますが、もともとはシンボル化した記号のようなものでした。円形はキャンプ地か泉を表し、人間や精霊はUの字のような形で、その横に丸があれば女性、槍があれば男性を表すといったものです。そうした記号を組み合わせて、どこどこに泉や山があるなどと、具体的な場所が描かれました。

—— 風景画や地図のようなものだったのでしょうか？

窪田 そうですね。ただ、彼らはよく点描を用いるのですが、その点のつひとつが精霊が土地を旅する時間の経過を表しているようにもとれます。瞬間を切り取っているのではなく、実際に歩きながら描いている、とでもいいますか。

—— そもそもその絵というものの捉え方がわれわれと違うのかもしれないですね。ところで、それらは何に描かれているのですか？

窪田 ヨルング村のある大陸北部では、今でも「樹皮画」といって、ユーカリの樹皮にオーカーという天然の顔料で描いています。一方、中央砂漠エリアでは、1970年代頃





(写真左)販売のために描かれた樹皮画。クランのドリーミングの場所が描かれる
(写真右)樹皮画を描く。細い筆をつくり、赤、黄、黒、白の4色の顔料(オーカー)で描く
(写真提供:窪田幸子氏)

から西洋の技法を取り入れキャンバス地にアクリル絵の具で描くようになりました。——伝統的なものばかりではないんですね。

窪田 はい。アボリジニは、1788年にオーストラリア大陸へのイギリス人の入植が始まったことで、入植者による迫害を受けるようになったのですが、その後、権利回復運動などにより1967年に市民権を獲得しました。経済的自立が必要になったことで注目されたのが、アボリジニアートだったのです。木が育たない砂漠では樹皮画のように商品として流通させるものがない、国の支援を受けながら新しいスタイルを生み出し、次第に普及させていきました。また、伝統的な樹皮画などは、もとも

と男性だけが描くものでしたが、商品としての価値が認められるようになると、80年代ぐらいから女性も描くようになり、次第に変化しています。

——伝統を守りながらも新しいものを上手に取り入れていったんですね。

窪田 はい。ただ当初は、伝統的な技法ではない新しい技法はアボリジニの間でもアボリジニアートとして認められず、また、先住民アボリジニに対する差別的な先入観も根深くあり、国内での評価は低かったです。

——そこからどうやって現在のようない高い評価を得るまでに？

窪田 80年代頃から、世界的に先住民のアートが注目されるようになり、2000年代に入る頃にはアボリジニアートが特にアメリカやヨーロッパで高く評価されるようになりました。その影響から国内でも次第に人気が高まり、入植者たちはアートを通じて今まで知らなかったアボリジニの精神世界に触れるようになったのです。また、彼らの文化への理解も深めていくようになっていきます。

また、この時期はオーストラリアにとって2001年の連邦成立100年を前に、国家的アイデンティティを模索していた重要な時期でした。そこで国内外で注目を集めていたアボリジニアートが恰好の材料となったのです。そうして国を代表するアートとしての地位を獲得し、空港や公的

機関の入り口にアボリジニアートが飾られ、2000年のシドニー・オリンピックのシンボルにも採用されました。

アボリジニの言葉にも注目。「語る力」の可能性も探求

——アボリジニの人々にとって、アートは

単なる芸術ではなく、生活に根付いた重要な役割を持つている、またそれが彼ら自身の社会を守っていくことにもつながったということですね。アートが先住民と入植者の距離を縮めたという点がとても興味深いです。先生がアボリジニの文化や歴史をご研究される中で、アボリジニアートの存在が大きな意味を持つていることもよく分かりました。

最後に今後の研究のテーマについてお聞

かせください。

窪田 アボリジニはもともと文字を持たない人々です。アートとともに彼らの「語る言葉」を研究していきたい、独特の世界観をより深く探っていきたくて考えています。言語学者など文化人類学以外の専門家とのつながりもつくりながら、言葉の持つ「語る力」の可能性を追求していきたいです。

——違う視点が加わればまた見えてくるものも変わってくるかもしれませんね。新しい発見を期待しております。

本日はどうもありがとうございました。

「ワンロード」現代アボリジニアートの世界

【開催場所期間】

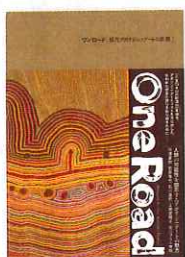
●香川県立ミュージアム 16年8月6日～9月19日

●市原湖畔美術館 16年10月1日～17年1月9日

●釧路市立美術館 17年4月7日～5月7日

www.oneroad-aboriginalart.jp

「こだわりアカデミー」読者プレゼント



今月号の「こだわりアカデミー」にご登場の窪田幸子氏監修の『ワンロード | 現代アボリジニアートの世界』(現代企画室)を、抽選で5名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、①氏名、②貴社名、③住所(送り先)、④電話番号、⑤書籍名、⑥本紙の簡単な感想をご記入の上、下記までご応募ください。

【宛先】

「こだわりアカデミー」読者プレゼント係

■FAX: 03-3580-7610

■Eメール: talk@athome.co.jp

※2016年9月19日(月)到着分まで有効とし、当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。応募者の個人情報は、抽選・賞品の発送のみに利用します。